

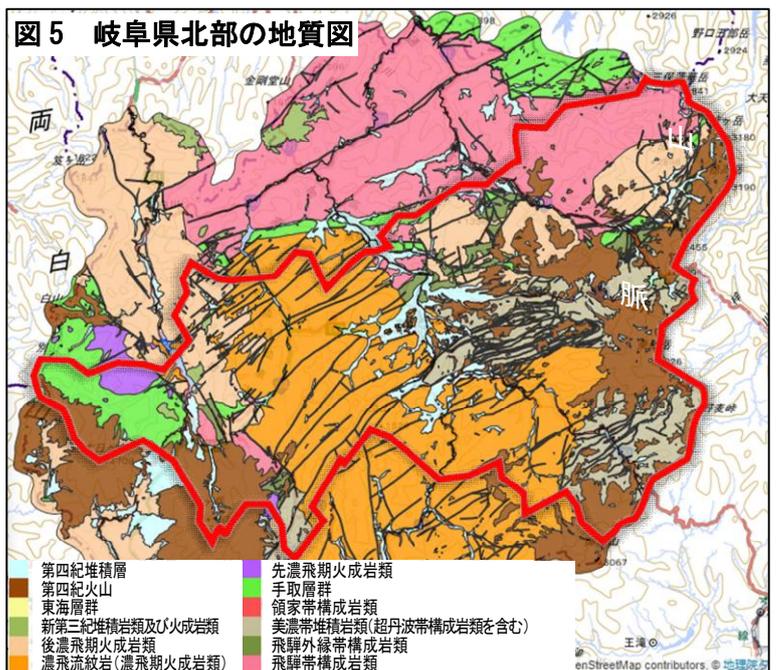
(2) 地形・地質・水系



東部の県境に飛騨山脈（富山県・岐阜県・長野県に跨って連なる山脈、一部新潟県の部分あり）、西部の県境に両白山地（富山県・岐阜県・石川県・福井県に跨る山域）があり、それらに挟まれて飛騨高地が広がります。飛騨山脈は槍ヶ岳、奥穂高岳など県境に連なる高山を軸とした傾動地塊で、南部に焼岳、乗鞍岳、御嶽山などの火山を有します。石川県境は標高1,800m内外の峰が続き、白山などの火山が分布します。飛騨高地は標高1,000~1,500mの山地が分布し、中央部に位置する高山盆地は標高500~600mで古い岩盤で形成され河川堆積物はわずかです。一方、古川国府盆地は河川による堆積が見られます。上宝盆地は高原川の浸食により生じた数段の河岸段丘が発達しています。

地質は、東部は第四紀火山が多く、中央部の多くは濃飛流紋岩が広がり、西部の一部に手取層群が見られます。

河川は、御嶽山、位山、大日ヶ岳を東西に結ぶ線が中央分水界で、これを境に日本海側に注ぐ神通川（宮川）水系と庄川水系、太平洋側に注ぐ木曽川水系があります。



(画像：Web版岐阜県地質図『ジオランドぎふ』から引用)

(3) 気候

本市の気候は、海拔高度が高い場所が多いため、東北地方北部や北海道南部と似ています。全体的に内陸性気候で、昼夜、夏冬の気温差が大きくなります。夏は日差しが強く、冬は厳しい寒さが続きます。大きな標高差により地域ごとに気候の違いも見られ、飛騨山脈をはじめ標高の高い地域は山岳気候です。

令和5年(2023)の高山特別地域気象観測所における年平均気温は13.8℃、最高気温は8月に37.0℃、最低気温は1月にマイナス11.1℃でした。統計が開始された明治32年(1899)5月から令和6年(2024)9月の間で、最高気温の一位は平成6年(1994)8月8日の37.7℃、最低気温一位は昭和14年(1939)2月11日のマイナス25.5℃でした。

令和5年(2023)の高山特別地域気象観測所における年間降水量は1,475mmで、飛騨地方の中では比較的少なく、日照時間は1,934.4時間で比較的長くなっています。平均風速は1.7m/sで、一年を通じて風の弱い地域です。

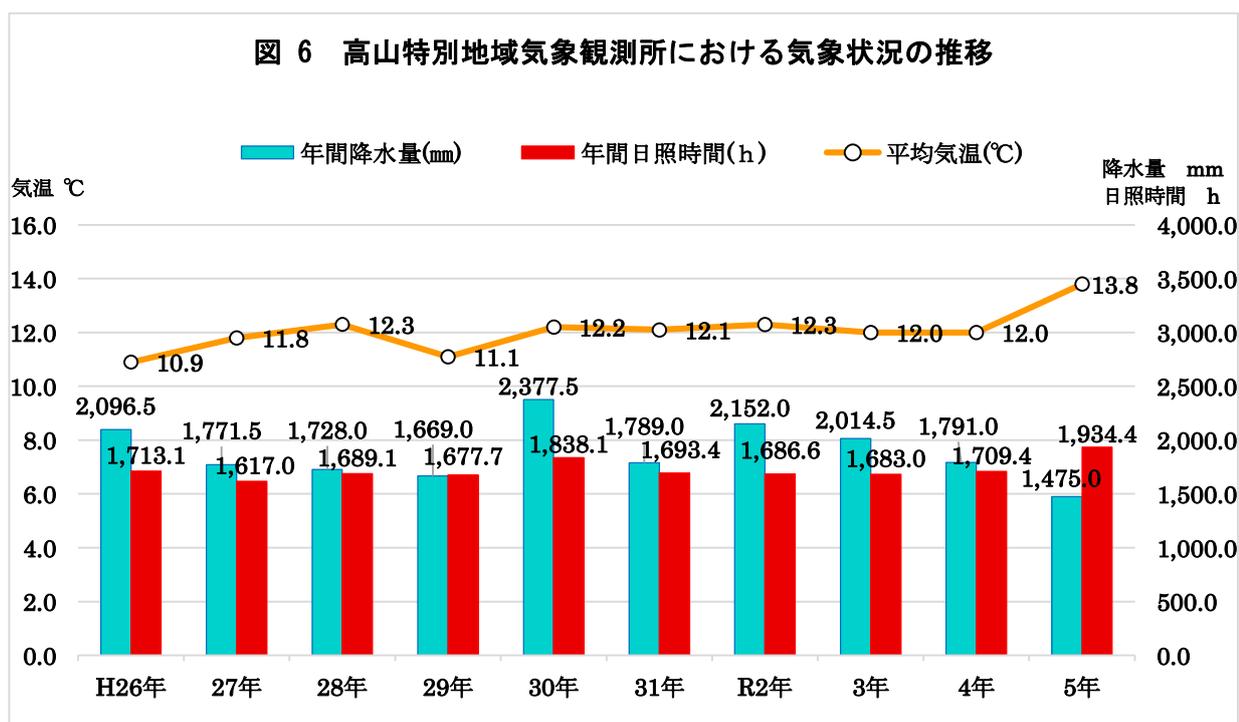
■令和5年(2023年1月～12月)気象状況の比較

観測地点	平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	降水量合計 (mm)	日照時間 (時間)	平均風速 (m/s)
高山	13.8	37.0	-11.1	1,475.0	1,934.4	1.7
六厩	10.1	32.0	-17.5	2,252.0	1,901.4	0.9
宮之前	11.0	33.3	-17.4	1,888.5	2,042.6	1.1
栃尾	12.0	34.1	-11.6	1,774.0	1,885.1	1.0

(出典：岐阜県気象台データ)

※観測所所在地(海拔m) 高山：桐生町(560m)、六厩：荘川町六厩(1,015m)、
宮之前：朝日町宮之前(930m)、栃尾：奥飛騨温泉郷今見(765m)

図6 高山特別地域気象観測所における気象状況の推移



(出典：岐阜県気象台データ)

(4) 生態系

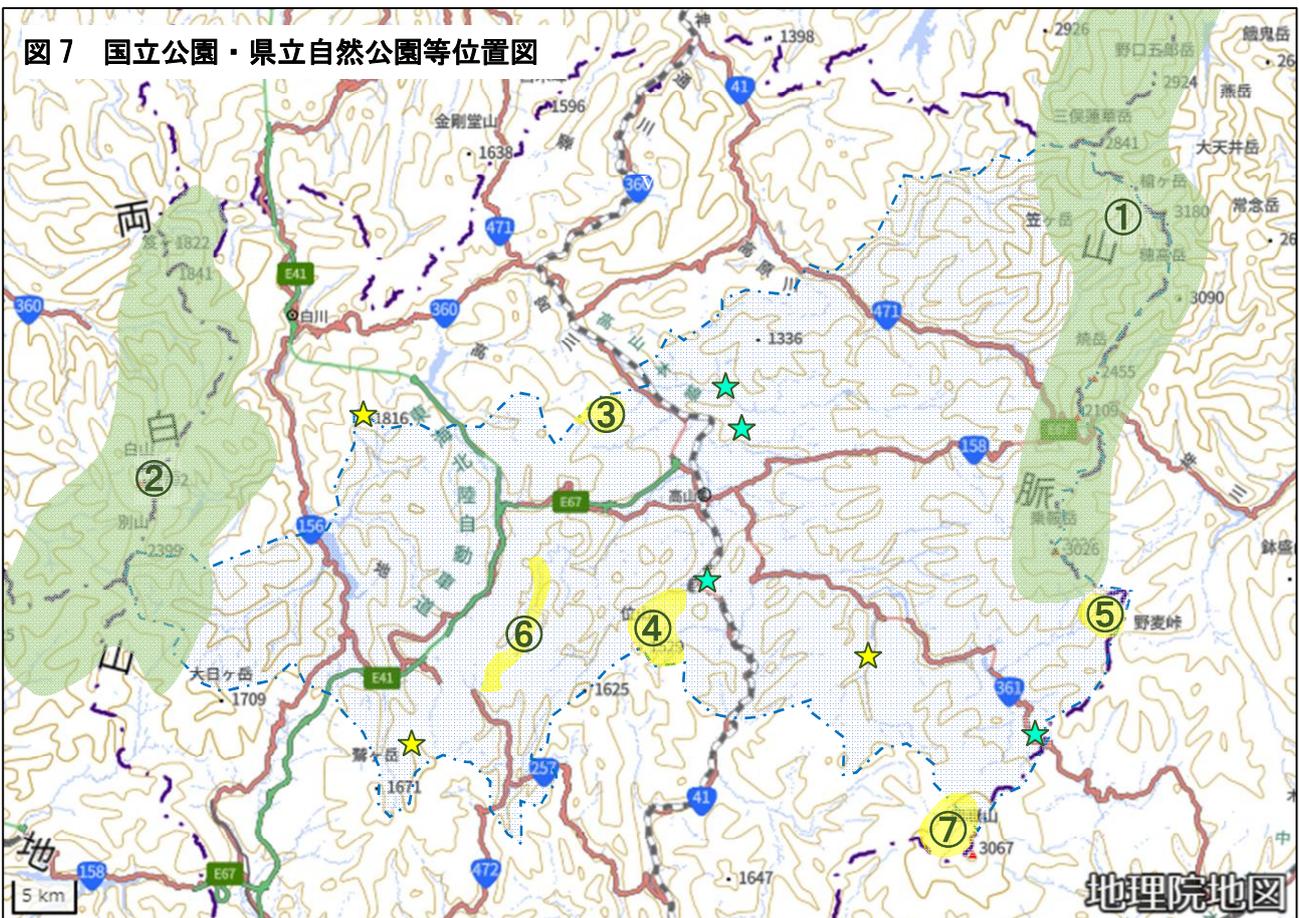
広大な面積と変化に富んだ地形のうえに、原生林や雑木林、人工林などの多様な森林、河川、湿地、農地、集落など、自然そのものの環境と、人間が自然に様々な働きかけを行って形づくった多様な環境が分布しています。生物多様性の屋台骨とも称される国立公園が2箇所、県立自然公園が5箇所、県指定自然環境地域3箇所、緑地環境保全地域4箇所と豊かな自然環境を有しています。

■ 高山市の国立公園及び県立自然公園の指定状況

(単位：k m²)

区分	名称	指定年月日	地域名	面積	
				全体面積(岐阜県分)	高山市分
国立	①中部山岳	S9.12.4	高山、丹生川、朝日、高根、上宝	1,743.23 (242.19)	233.27
	②白山	S37.11.12	荘川	499.00 (140.17)	23.01
	小計			—	256.28
県立	③宇津江四十八滝	S35.8.30	国府	8.00	8.00
	④位山舟山	S44.4.1	一之宮、久々野	26.56	14.39
	⑤野麦	S47.4.1	高根	4.28	4.28
	⑥せせらぎ溪谷	S8.4.1	清見	13.18	11.67
	⑦御嶽山	S11.4.1	朝日、高根	42.76	21.04
	小計			—	59.38

(出典：岐阜県ホームページ)



★…県指定自然環境地域 ★…緑地環境保全地域

森林面積は、2,000k m²以上で、自然林は6割を占め、残り4割の人工林の大半はスギ、ヒノキ、カラマツの針葉樹が占めています。

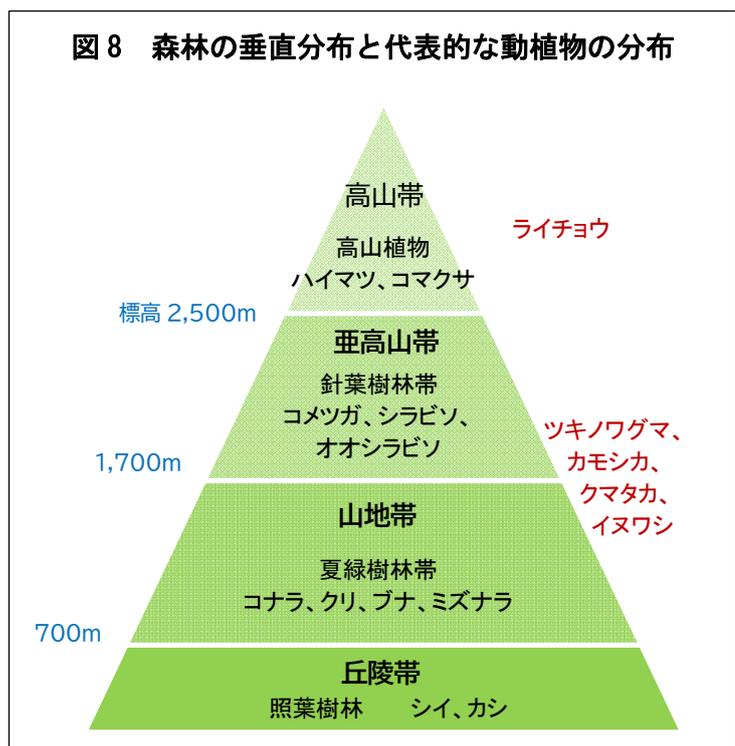
高山市で最も広い面積を占める標高1,700m以下の山地帯は夏緑樹林が広がり、標高の低い丘陵帯は照葉樹林が見られます。亜高山帯は常緑針葉樹林、それ以上の高山帯は樹木が大きく育つことができずハイマツや高山植物が分布しています。

森林は、それぞれの植生を構成する多様な植物と、植生に対応した多様な動物が生息しています。高山帯のハイマツ林帯は、国の特別天然記念物ライチョウが生息しています。亜高山帯以下の標高で特別天然記念物のニホンカモシカや、ツキノワグマ、クマタカやイヌワシなどの森林性の大型動物が生息しています。この広大な森林は多種多様な動植物の生息地となっています。

河川は、源流部の溪流から川幅約100mの河川中流域までありますが、水生生物の生育環境としては比較的水温が低いため、氷河期遺存種のカワシンジュガイが生息しますが、種類は全般的に少なく、河川内の構造物や放流活動による影響も受けます。

湿地は大規模なものではなく、分水嶺上や峠などに湿原があり、ミズバショウをはじめとした湿原植物が生育しています。そのほか、河川や湖沼の周辺、山すそなどに小規模な湿地が多く点在しています。

図8 森林の垂直分布と代表的な動植物の分布



2 社会的状況

(1) 市域の変遷

明治8年(1875)、高山一之町村他2村が合併し、高山町として町制が施行されました。大正15年(1926)に灘村が編入合併し、昭和11年(1936)に高山町と大名田町が合併し高山市として市制が施行されました。昭和18年(1943)に高山市に上枝村が編入合併し、昭和30年(1955)に高山市に大八賀村が編入合併しました。

平成17年(2005)2月1日、旧高山市(139.57 k m²)は、大野郡丹生川村(227.15 k m²)・清見村(359.16 k m²)・荘川村(323.28 k m²)・宮村(51.89 k m²)・久々野町(106.10 k m²)・朝日村(187.37 k m²)・高根村(220.66 k m²)、吉城郡国府町(89.05 k m²)・上宝村(475.12 k m²)の2町7村を編入し、広大な面積を有する新たな高山市として誕生しました。

図9 平成17年の合併前の郡・町村の分布図

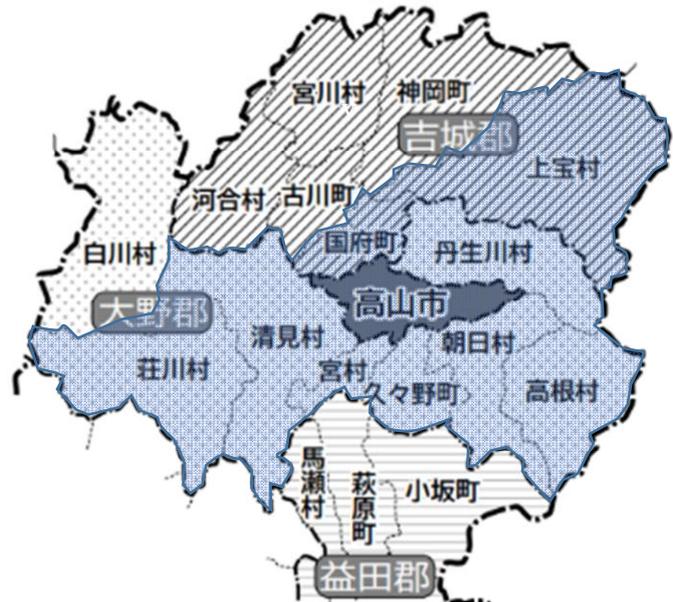
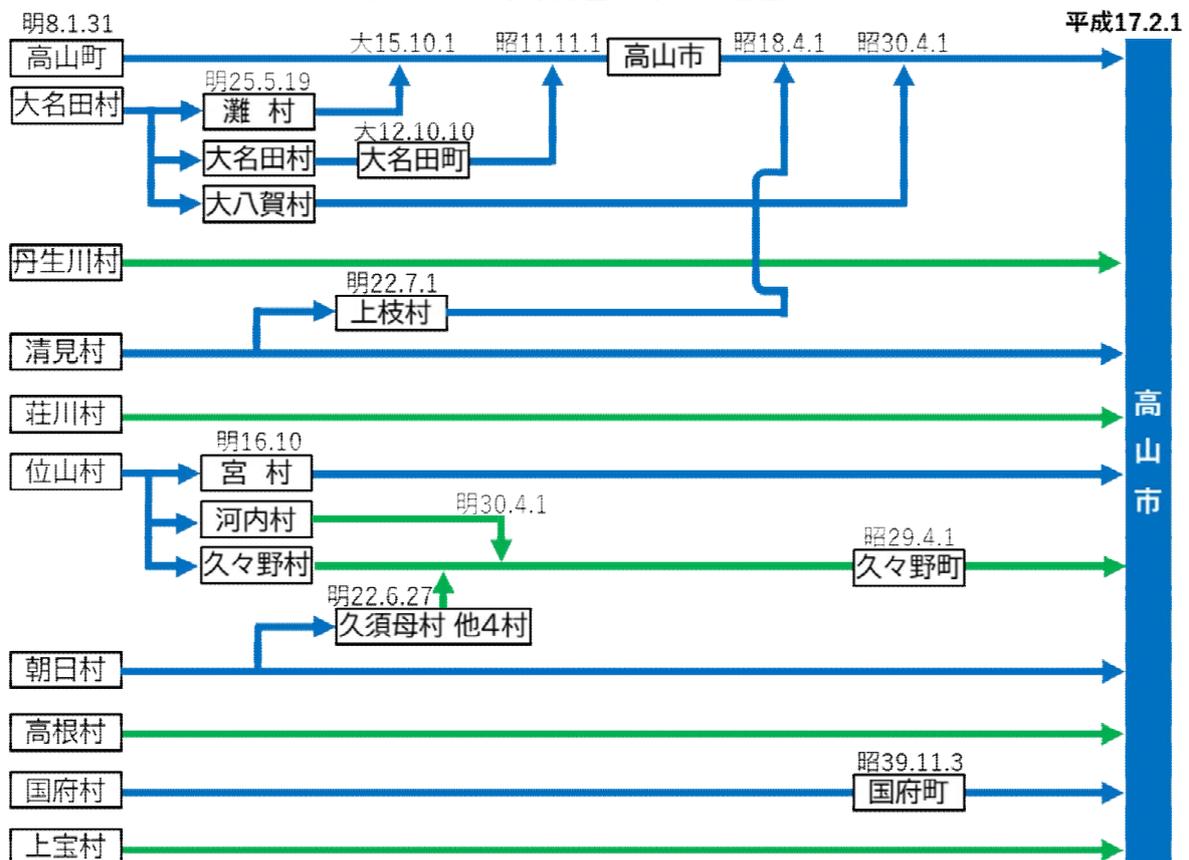


図10 市町村変遷（合併の経過）



■市町村合併の経過

市町村名 面積(k㎡)	時 期	内 容	地名由来(諸説あり)
高山市 139.57	明治 8 年(1875)	高山一之町村他 2 村が合併し町制施行(高山町)	現在の城山に近江の多賀天神を祀り、天神山・多賀山と称したことによる
	大正 15 年(1926)	高山町に灘村が編入合併	
	昭和 11 年(1936)	高山町と大名田町が合併し市制施行(高山市)	
	昭和 18 年(1943)	高山市に上枝村が編入合併	
	昭和 30 年(1955)	高山市に大八賀村が編入合併	
丹生川村 227.15	明治 8 年(1875)	新張村他 31 村が合併	村を流れる丹生川(小八賀川)による
清見村 359.16	明治 8 年(1875)	三日町村他 28 村が合併	諸河川の源流として清水とし、キヨミズの水(ミ)を同音とした
	明治 22 年(1889)	上枝村として 10 村が分立	
荘川村 323.28	明治 8 年(1875)	六厩村他 17 村が合併	村の中央を流れる庄川による
宮村 51.89	明治 8 年(1875)	宮村他 11 村が合併(位山村)	飛驒一宮水無神社の所在による
	明治 16 年(1883)	位山村が 4 村に分割(宮村他)	
久々野町 106.10	明治 8 年(1875)	久々野村他 11 村が合併(位山村)	中世以来の郷名による
	明治 16 年(1883)	位山村が山之口を含む 4 村に分割(久々野村他)	
	明治 22 年(1889)	久々野村に久須母村他 4 村が編入合併	
	明治 30 年(1897)	久々野村と河内村が合併(久々野村)	
	昭和 29 年(1954)	町制施行(久々野町)	
朝日村 187.37	明治 8 年(1875)	甲村他 24 村が合併	「乗鞍岳から昇る朝日のように栄光あれ」と命名
	明治 22 年(1889)	朝日村から久須母村他 4 村が分立	
高根村 220.66	明治 8 年(1875)	中洞村他 11 村が合併	御嶽を望む高原があり、高峰を望み見る
国府町 89.05	明治 8 年(1875)	三川村他 21 村が合併(国府村)	飛驒国府の所在地であったとの伝説による
	昭和 39 年(1964)	町制施行(国府町)	
上宝村 475.12	明治 8 年(1875)	吉野村他 29 村が合併	上高原の高原(タカハラ)に宝の字をあてた

(2) 人口の動向

① 年齢階層別人口の推移及び将来の見通し

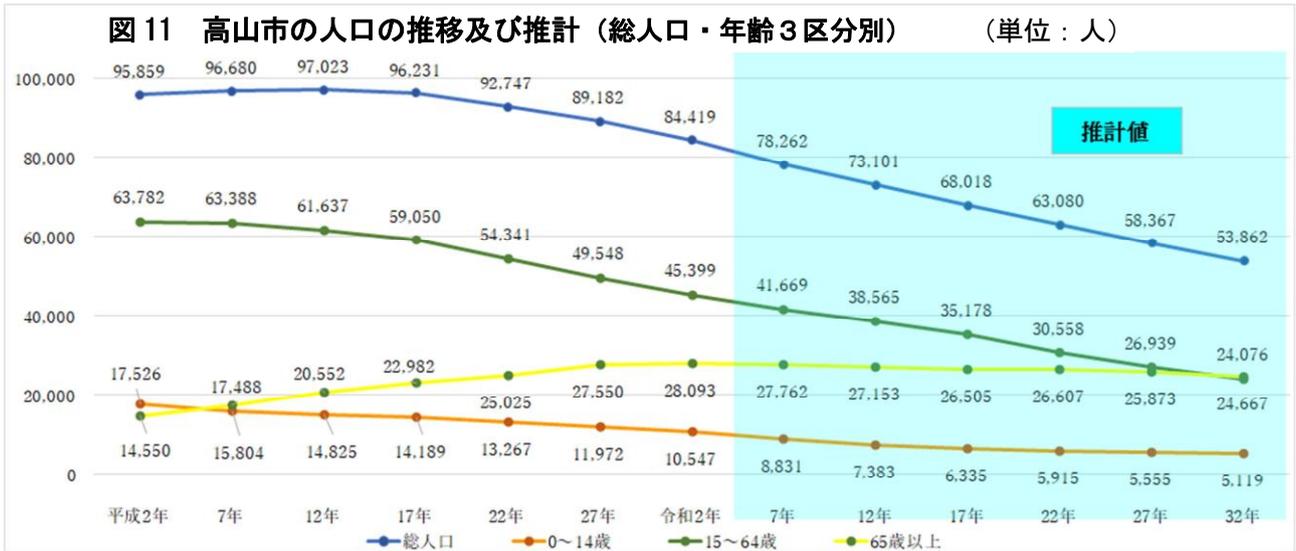
令和 7 年(2025)3 月 1 日現在、高山市の住民基本台帳人口は 82,219 人(男性 39,261 人・女性 42,958 人)、世帯数は 36,400 世帯です。

令和 2 年(2020)の国勢調査による年齢階層別人口の割合は、年少人口(14 歳以下)12.6%(10,547 人)、生産年齢人口(15~64 歳)54.0%(45,399 人)、高齢者人口(65 歳以上)33.4%(28,093 人)となっています。

国勢調査による人口のピークは、市町村合併後の平成 12 年(2000)の 97,023 人です。

国勢調査人口及び国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口(令和 5 年 12 月推計)」が推計した推計総人口は、令和 32 年(2050)時点で 53,862 人です。

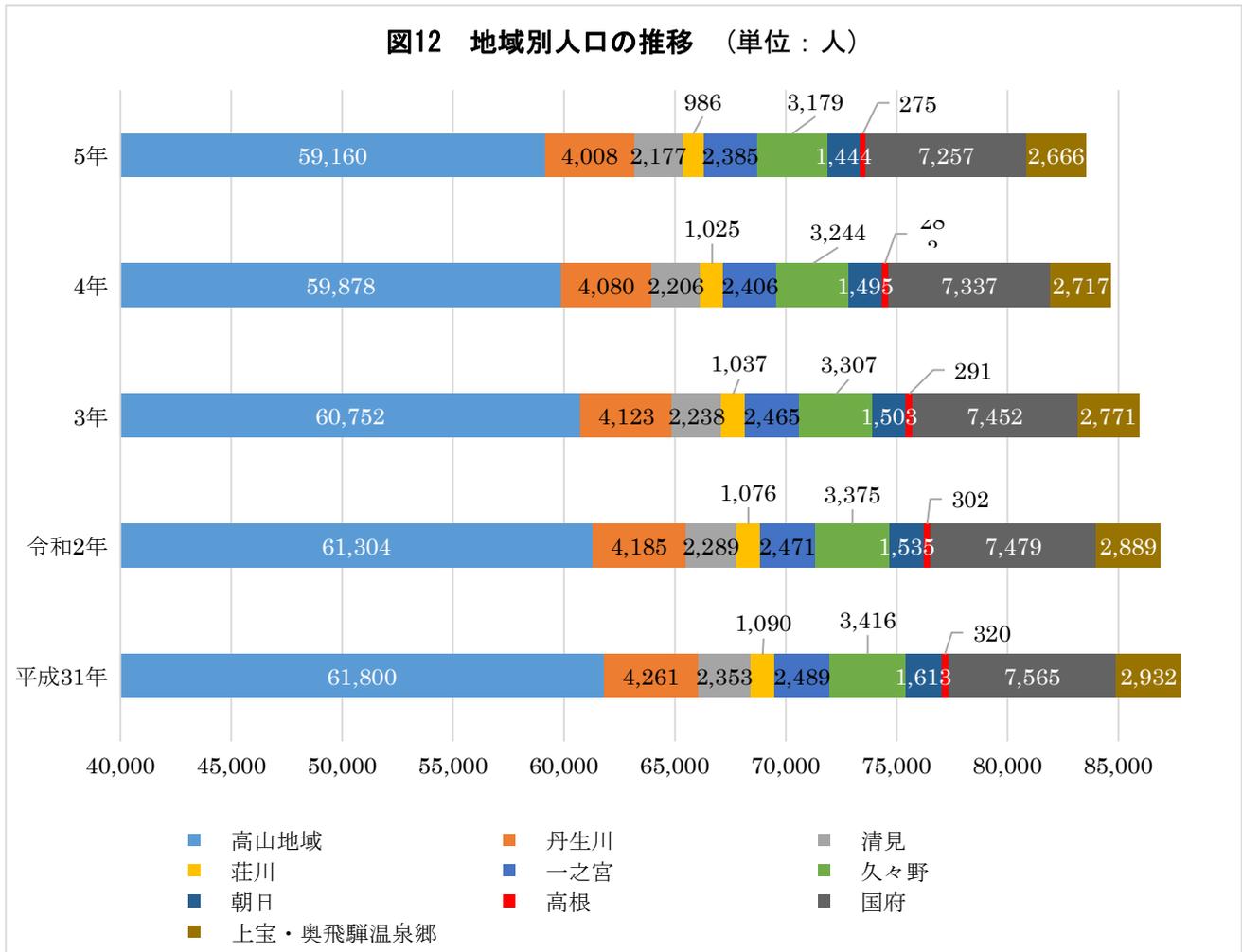
平成 2 年(1990)から令和 32 年(2050)の高山市の人口及び推計人口の推移(総人口・年齢 3 区分別)を見ると、年少人口・生産年齢人口はともに下降傾向で、高齢者人口は令和 2 年までは緩やかに上昇し、その後の推計値は減少傾向となっています。



※平成12年以前は、合併前の9町村の人口を含む。

② 地域別人口の推移

住民基本台帳による地域別人口の推移は、以下のグラフの通り全地域とも減少傾向を示します。

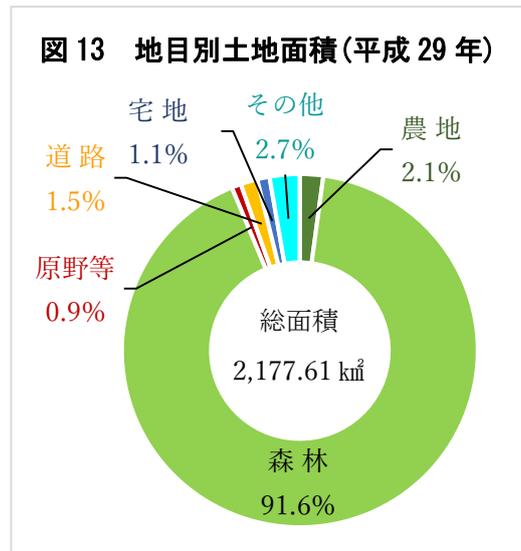


(3) 土地利用

平成 29 年(2017)の地目別土地面積は、総面積 2,177.61 k m²のうち森林 91.6%、農地 2.1%、道路 1.5%、宅地 1.1%となっており、市域の大部分を森林が占めています。

地目別土地面積の推移は、農地が減少傾向にあり、宅地が微増しています。

高山地域は全域が都市計画区域として指定され、J R高山駅を中心に市街地が形成されています。その他の地域は、主に支所庁舎周辺に住宅地が形成されているほか、谷筋や平地に農山村集落が点在しています。



■地目別土地面積の推移 (単位: k m²)

	平成 25 年	26 年	27 年	28 年	29 年	平成 25→29 年増減
農地	47.30	47.20	46.90	46.80	46.50	△80
森林	1,996.15	1,996.96	1,997.52	1,997.33	1,995.30	△85
原野等	19.04	19.04	19.04	18.83	18.83	△21
道路	32.95	33.16	33.36	33.36	33.32	37
宅地	24.21	24.18	24.31	24.33	24.39	18
その他	58.02	57.07	56.48	56.96	59.27	125
総面積	2,177.67	2,177.61	2,177.61	2,177.61	2,177.61	

(4) 交通

① 道路交通

本市の道路交通網は、市の西部を東海北陸自動車道が縦断し、飛騨清見 I C から中部縦貫自動車道が高山市街地までを結び、国道は中部縦貫自動車道を除いて 7 路線、県道は 27 路線あり、これらと住宅地等を結ぶ無数の市道で構成されています。

国道のうち、市域を縦断し名古屋市・富山市へ連絡する国道 41 号、市域を横断し松本市・福井市へ連絡する国道 158 号は、特に主要な幹線道路となっています。



幹線道路や中心市

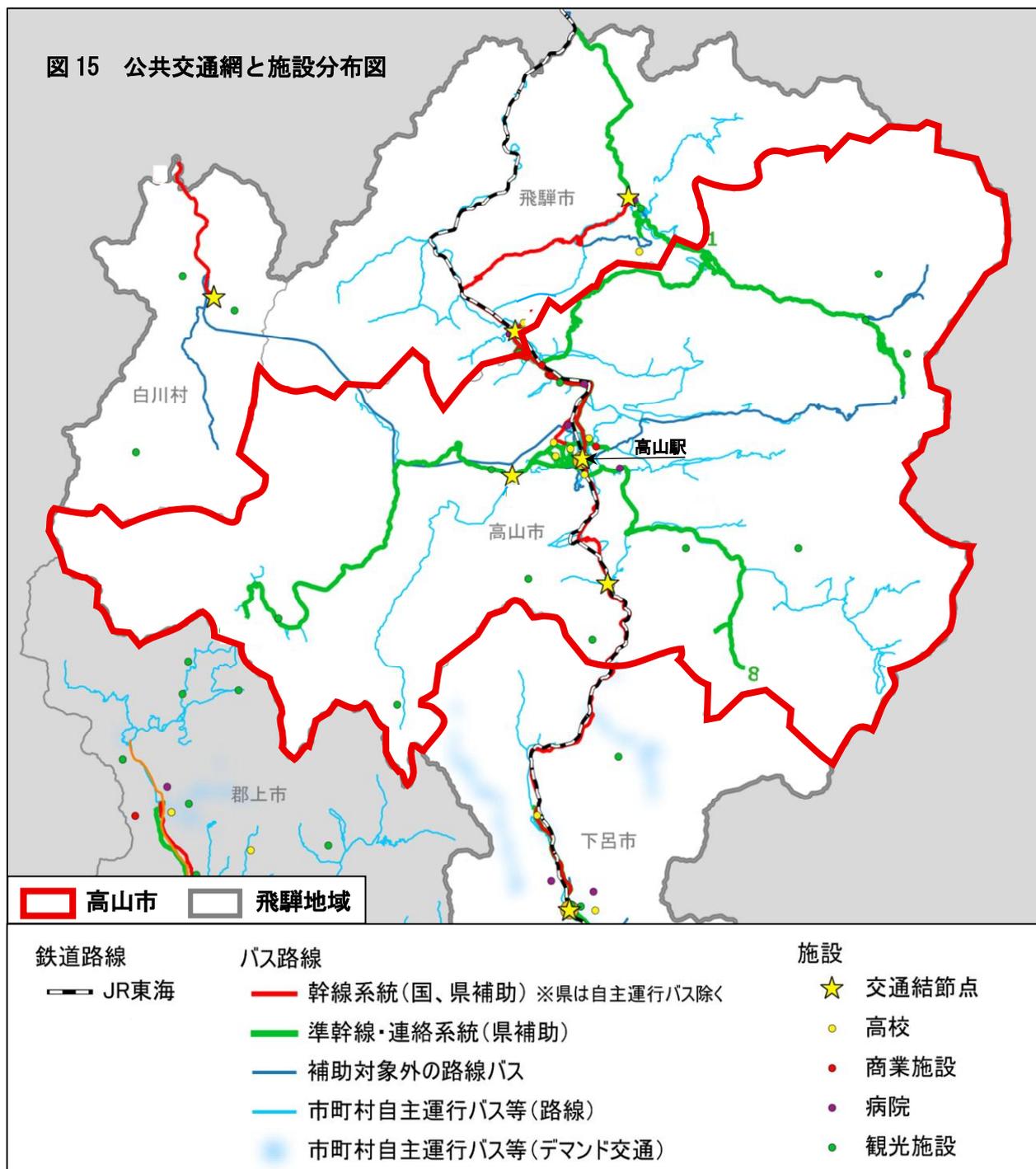
(出典: 岐阜県ホームページ 岐阜県の高規格幹線道路地図(R6.4)を加工)

街地内の渋滞緩和への寄与が期待される中部縦貫自動車は、現在高山 I C から丹生川 I C (仮称) 間において、整備が進められています。

② 公共交通等

鉄道は J R 高山本線 (岐阜～富山) が市域を縦断し、高山駅をはじめ市内に 6 駅があります。

バスは、本市と他の都市部とを結ぶ高速バス、市域を中心に広範囲を結ぶ幹線バスのほか、生活支援や観光を目的に高山市が自主運行をしている地域バス・中心市街地バス・観光特化型バスがあります。さらに、高根地域で公共交通空白地有償運送車輛が運行しています。

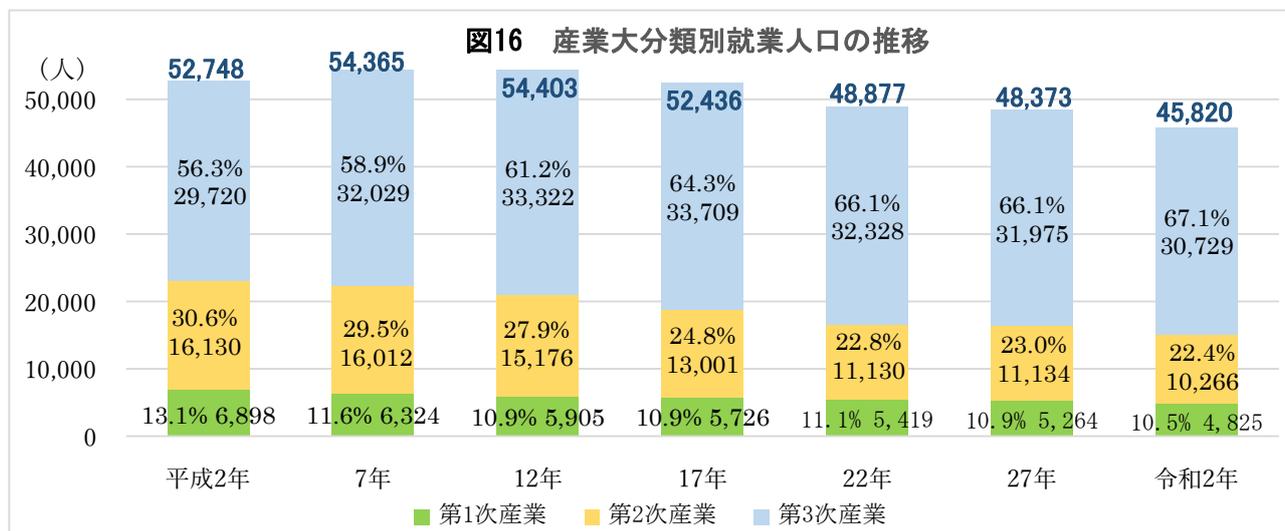


(出典：岐阜県ホームページ 岐阜県地域公共交通計画(R4. 7)を加工)

(5) 産業

① 産業別就業者数

国勢調査による令和2年(2020)の就業者数は45,820人で、平成12年(2000)の54,403人をピークに減少しています。産業大分類別の割合は、第3次産業が67.1%と最も高く、次いで第2次産業22.4%、第1次産業10.5%です。第3次産業が増加傾向にあり、第2次産業や第1次産業は減少傾向にあると言えます。



(出典：国勢調査)

② 第1次産業

岐阜県市町村民経済計算による令和3年度(2021)の市の総生産額は、336,906百万円、県内のシェア4.2%、順位は8位です。第1次産業の総生産額は11,714百万円、うち農業が10,320百万円で県内シェアは21.6%、全産業の中で県内シェアとしては最も高い値です。高冷地の冷涼な気象条件と肥沃な土壌を活かし、稲作やトマト・果樹・花き等の栽培が盛んで、特にホウレンソウの生産量は日本一です。肉質の良さが評価された飛騨牛は、日本のブランド牛として定着しています。

③ 第2次産業

第2次産業の総生産額は95,475百万円、市の総生産額の28.3%を占めます。飛騨匠^{ひだのたくみ}の優れた木工加工技術を継承する建設業や木工関連産業、農産物加工による清酒や漬物が製造されています。海外への販路拡大などが期待されるものの、生産拠点の海外移転や伝統的工芸品産業の担い手不足などもあり、市内総生産額・全産業に占める割合も減少傾向にあります。

④ 第3次産業

第3次産業の総生産額は229,717百万円で、市の総生産額の68.2%を占めます。高山市は飛騨地域の中核的な商業拠点であるものの、品ぞろえや買物以外の付加価値を求めて県外へ出向く人や、時間に制約なく簡単に比較購入ができる通信販売などによって卸・小売業は厳しい状況にあります。一方、観光業は宿泊施設が年々増加し、年間を通じて国内外から多くの観光客が訪れ、これに伴い観光消費額も増加傾向にあります。令和6年(2024)の観光入込客数は約442万人、宿泊者数は約225万人、うち外国人宿泊者数は約77万人でした。

3 歴史的背景

(1) 旧石器時代～弥生時代

市内は険しい山々が巒のように重なり、その一部に宮川や川上川などによって形成された沖積世の平地や、河岸段丘に続く山麓の緩斜面、扇状地が形成されています。市の中央に高山盆地、北部に古川国府盆地が広がっています。

各時代の遺跡が多数存在していますが、それは古くから人々がこの地に住みつき、豊かな自然の恵みを受けつつ暮らした証です。

標高 1,200m の日和田高原にある池ノ原遺跡（高根町日和田）は、土器が作られる前の旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。約 1 万年前の縄文時代草創期に特有な有舌尖頭器は、平成 28 年（2016）3 月までに市内各地で 40 点が確認されています。

河川沿いの段丘や丘陵上に多くの縄文時代の遺跡が見つかっており、中には大規模な集落跡もあります。堂之上遺跡（久々野町久々野）はその一つであり、飛騨川最上流部の台地上に所在する縄文時代前期から中期の集落跡で、複数期にわたって 43 の住居跡が確認されています。遺跡からは関東、信州、東海、北陸各地方の影響が見られる土器が出土しており、縄文時代の生活と祭祀の渾然としたあり方、文化交流のあり方を典型的に示す重要な遺跡として国の史跡に指定されています。他の遺跡からも同様に他地域の影響を受けた出土遺物が発見されており、山々に囲まれ隣接地域との行き来が困難な地理的位置にありながら、この当時から東西文化の幅広い交流が見られます。

弥生時代の遺跡は宮川流域に多く確認されています。弥生時代の中期に飛騨独自の内垣内式と呼ばれる横方向に矢羽根状の文様が施される横羽状文甕が出現し、飛騨の独自性が伺えます。後期になると北陸系の土器が見つかっており、北陸地方との交流が盛んになったことが分かっています。

(2) 古墳時代～平安時代

文献の中に初めて登場する飛騨の事件は、両面宿禰の反乱です。『日本書紀』によれば、仁徳天皇の時代、身体が一つで顔が二つ、四手四足の宿禰がヤマト王権の命令に従わず、難波根子武振熊なにわねここたけふるくまによって討伐されたと記されています。飛騨の豪族がヤマト政権と関係を持つようになったことを、武振熊の子孫が誇張して記したものと考えられています。

三日町大塚古墳（国府町三日町）は纏向型前方後円墳とす



写真 3 糠塚遺跡の発掘調査



写真 4 整備された堂之上遺跡



写真 5 三日町大塚古墳

る説もあり、飛驒における最初期の古墳と考えられています。4世紀代の古墳は現在発見されていません。5世紀に築かれた亀塚古墳(国府町広瀬町、滅失)からは甲冑が、冬頭王塚古墳(冬頭町)からは鉄剣や鏡が出土しました。これらの古墳からは飛驒が中央の王権と関係性を持ちながら、飛驒という地域単位を意識し始めたことがうかがわれます。



写真6 亀塚古墳から出土した甲冑

古墳時代後期は、中国大陸や朝鮮半島との関係が深まって新しい技術や考え方が伝わり、墓制でも横穴式石室が取り入れられるなど大きく変化した時期でした。岐阜県下最大の横穴式石室をもつこう峠口古墳(国府町広瀬)をはじめ、国府地域はこうと洞古墳(国府町瓜巢)、海具江古墳(国府町宇津江)など注目される古墳が多くあります。旧高山市内でも小丸山古墳(三福寺町)、岩屋古墳(西之一色)などの横穴式石室を有する古墳があります。

古墳時代終末期は墳丘を持つ横穴式石室とともに、斜面などに横穴を掘って墓とした横穴墓が三福寺町や冬頭町に見られます。昭和63年(1988)、三福寺町の桧山古墳から50体近い人骨が発見されました。これらの横穴の被葬者は、氏族の違いなどを墓制でも区別したものと考えられています。

古墳の数は滅失も含めて飛驒全体で521基、高山地域に80基、国府地域に339基が確認でき、圧倒的に国府地域に多くその隆盛をうかがうことができます。

『日本書紀』朱鳥元年(686)に「詔曰、新羅沙門行心、与皇子大津謀反、朕不忍加法、徒飛驒国伽藍」とあります。大津皇子の謀反に加わった新羅の僧である行心が飛驒の伽藍に流されたという内容で、この頃すでに飛驒に中央政権に認識された寺院が存在していたことを示しています。7世紀から8世紀、高山盆地に2か寺、古川国府盆地に9か寺の存在が分かっています。奈良時代に、さらに高山地域に国分寺、国分尼寺が造営されました。国分寺、国分尼寺に葺かれた瓦は赤保木瓦窯跡(赤保木町)で焼成されたものでした。



写真7 『日本書紀』の斐陀国条

古墳造営と寺院建立の状況から地域豪族の勢力の中心は、当初は古川国府盆地にありました。国分寺が高山盆地に造営されたことは8世紀の律令体制下で政治・文化の中心が高山へ移ったことを示しています。

こうした寺院の造営に関わったのが「飛驒匠」と呼ばれる技術者です。養老2年(718)に制定された養老賦役令に「斐陀(飛驒)国条」として、調・庸の税負担を免除する代わりに里ごとに匠丁(木挽や大工)10人、匠丁4人につき厮丁(炊事係)を1人、合わせて毎年100人前後を1年間、都の造営のために派遣するよう定められています(飛驒工制度)。技術者たちは修理職木工寮に所属し、平城宮、東大寺、平安宮など都の建物や寺院の造営に貢献しました。技



写真8 東山道飛驒支路の一部と推定される位山道

術者たちは、当時の公道であった東山道飛騨支路を通して都へ向かったと考えられています。このうち、位山を越える位山道に、平安時代のものと推定される石畳が残っています。

飛騨匠の労働は厳しい一面もあったようです。『類聚国史』によれば、平安時代前期は年に330日以上、350日以下の作業日数で従事していたことが分かります。そのような中、逃亡する者もいたようで、『日本書紀』によれば、逃げた匠を捕らえて差し出すよう太政官が諸国に命じています。飛騨匠をかくまう人も罰するともあります。飛騨匠がその技を見込まれ、有力者の元で働くこともあったようです。

保延、永治（1135～1141）年間に平時輔朝臣が飛騨守として三仏寺城（三福寺町歓喜寺の裏山）に在城していました。3代景則の頃に飛騨は平家の領国となり、4代景家は4人の子息とともに平家の臣として京に上っていましたが、治承5年（1181）木曾義仲の軍に攻められました。義仲勢は飛騨の良馬を求めて攻め入ったといわれます。留守を預かる景家の室、阿紀伊の方と、二子景綱の息女、鶴の前は臣下とともに戦いましたが石光山（片野町）で破れ、三仏寺城に籠城したものの城は落ちたとされています。



写真9 三仏寺城跡

(3) 鎌倉時代～戦国時代

鎌倉時代は、政治の中心地が国府町の広瀬郷、荒城郷へ移ったと考えられます。^{おのおのよし}多好方、^{かた}好節父子が飛騨の地頭に^{ぶじん}補任されたことが「吾妻鏡」に見られます。この多氏は元々都の伶人（楽人）で、源頼朝や北条氏に仕えた一流の舞楽演奏家でした。飛騨各地の祭礼で舞われる鬮鶏楽、鳥毛打は多好方らが教えたものとの説があります。

室町時代初期の飛騨は、守護の京極氏が南飛騨の益田に、国司の姉小路氏が北飛騨に勢力を競っていました。当時、国司と守護は併置の方針があり、守護は一国の行政政務官として軍事指揮権をもち、次第に領国支配を進め国司の権限を侵略しました。

京極氏は近江の守護の佐々木信綱の四男、氏信を祖とする一族です。京都の京極高辻に館を構えていたので「京極」と号し、代々幕府から守護に補任されました。

^{あおがこうじ}姉小路氏は、建武の中興（1334）に姉小路家綱が南朝方の飛騨国司に任ぜられたといわれます。その甥の^{ただつみ}尹綱は飛騨を任されていましたが、応永18年（1411）、足利義持（室町幕府第4代將軍）の命を受けた京極高光、高数らによって討たれました。

その結果、姉小路氏は小島城にいた小島氏を嫡流とし、向小島城の小鷹利氏と、古河城の古河氏の三家に分裂し、飛騨の最南端に京極氏の被官の三木氏が置かれました。この応永の乱後、飛騨は神岡町周辺の江馬氏、古川盆地に姉小路三家、大野・益田に京極氏と三氏が鼎立しました。

中央で応仁の乱で戦乱が広がる中、飛騨は「文明飛騨の乱」が起きて、姉小路勢と京極勢が一進一退の戦いをしていました。その後、京極側の多賀氏、高山外記などが守護代として勢力を伸ばし、天神山（現在の城山）に城を築きました。また、広瀬郷に広瀬氏、白川郷に内ヶ嶋氏、高山の中山に岡本豊前守、三枝郷に山田紀伊守、江名子に畑六郎左衛門、大八賀郷に鍋山豊後守などが各地に居城を構

え、割拠しました。こうした在地領主は隣国の上杉氏、武田氏に強く影響されていましたが、両氏の衰退とともに力を失うこととなります。

そこで台頭してくるのが桜洞城（現在の下呂市萩原町）の三木自綱で、永禄元年(1558)、広瀬氏と結んで高山外記、山田紀伊守を滅ぼしました。

そして、天正10年(1582)、三木氏は飛騨分け目の合戦といわれる国府町八日町の戦いで江馬輝盛に勝ち、飛騨をほぼ制覇しました。三木氏は、自ら絶家となった「姉小路」の姓を名乗り、松倉城を築城しました。



写真10 松倉城跡

(4) 安土桃山時代～江戸時代

① 金森氏六代による統治

豊臣秀吉は、天正13年(1585)7月に越中の佐々成政を攻めました。その際、越前大野城主であった金森長近は、飛騨の三木氏攻略を命じられました。長近は部隊を二手に分け、養子可重は南から桜洞城、鍋山城を、長近軍は牧戸、小鷹利、小島の各城を攻め、同年8月に三木氏の松倉城を攻め落として飛騨を平定しました。しかし、金森進攻の先導役を務めた在地武将の反乱、一揆が1年間は続きました。



写真11 金森長近肖像画

そして天正14年(1586)8月7日、長近は飛騨国3万8千石の国主として入府しました。また、関ヶ原の戦いは徳川方について前線で戦い、美濃上有知（美濃市）1万8千石、河内国金田（大阪府堺市）3千石を加増しました。

入国した長近は、当初、鍋山城（漆垣内町）に城下を構えましたが、土地条件から天神山古城に城を築くことにしました。城の建設は天正16年(1588)に始め、慶長5年(1600)までの13年間で本丸、二之丸を完成させ、以後、3年かけて三之丸を築きました。近世中期に高山陣屋の地役人上村木曾右衛門が書いた国内案内記『飛騨国中案内』に、「城郭の構え、およそ日本国中に五つともこれ無き見事なるよき城地」と記された名城でした。また、城と同時に城下町の工事も行われています。城を取り囲むように高台を武家地とし、その西側の一段低いところ（三町）を商人の町としました。また、東山に長近をはじめ歴代藩主が一族にゆかりのある寺院を創建、再興し、東山寺院群が形成されました。農民一揆の対策に、門徒の多い照蓮寺（現在の高山別院）を高山城と向かい合わせに配置して人の心を安め、宗和流茶道をはじめ、様々な文化を興すことも積極的に行いました。



写真12 高山城のCG復元図(現状の写真に配置)

金森氏の重要施策に商業振興、鉱山資源の開発、山林資源の開発があります。山林資源が豊富であったため、関ヶ原の合戦時に、表石高の倍近くになる6万石余並の軍役が負担できたともいわれ、4

代頼直は江戸の大火の際に檜の角材千本を献上しています。

高山における金森氏は6代107年間続き、京文化及び江戸文化を受け入れて、今日の高山の基盤を形成しましたが、元禄5年(1692)7月28日、頼皆が突然、出羽国上ノ山(山形県)に転封となって金森氏による統治は終わりました。

② 江戸幕府による支配

金森氏転封後の飛騨は幕府直轄地となり、代官は関東郡代の伊奈半十郎忠篤が兼任、金沢藩主の前田綱紀が高山城在番を命ぜられました。金沢藩は4~5百人の藩士を半年交替で駐留させ、「飛州高山在番諸法度」を設けて高山城建物を管理しました。

元禄8年(1695)1月12日、金沢藩の高山城取壊し願いが聞き届けられ、幕府から高山城破却の命令が出されました。同年4月22日から取壊しを開始、6月18日に全てを終えて帰藩しました。取壊しは、地元の者も金沢藩に加わってためらいなく行われ、建築材や庭木が我先に運び出されたと『願生寺由来記』(17世紀後半)に記されています。また、このときに武家屋敷もほとんどが取壊され、耕作地として町人に払い下げられました。



写真 13 高山陣屋の御蔵

代官所は金森氏の向屋敷に置かれ、幕府直轄領として高山陣屋において25代、177年にわたり支配が行われました。11代までが代官、12代大原彦四郎から郡代に昇格しています(歴代代官・郡代については表を参照)。この時代から宮川以東の旧高山城下町全域が町人町となり、江戸文化の影響を強く受けるとともに、高山祭が盛んとなり、屋台が造られ、市が行われるなど、社会的、文化的な基盤が確立されました。

明和8年(1771)、大原代官は幕府の命令で飛州全山に官材の元伐を中止、安永2年(1773)に飛騨の村々の代表を集め、検地のやり直しを言い渡しました。飛騨の農民たちは田を少ししか持っておらず、厳しい年貢が更に厳しくなると越訴、駕籠訴などをして検地中止を願い出しました。ここに明和8年(1771)から寛政元年(1789)まで、大原父子2代、18年間にわたる農民一揆が起きました。その中に主な事件が三つ含まれていて、明和、安永、天明騒動と呼ばれています。明和・安永騒動は9千人余の農民が罰せられ、大原彦四郎代官は飛騨を5万5千石に増石した功績により郡代に昇格しました。しかし、天明騒動で大原亀五郎郡代の政治不正が問われて、郡代は八丈島へ流罪、農民側の罪は軽く済みました。

善政をつくした代官・郡代もいます。7代長谷川忠崇は『飛州志』(18世紀)を著わしています。8代幸田善太夫は飢饉のために馬鈴薯(ジャガイモ)を農民に作らせ、「善太夫いも」「せんたいも」と今も呼ばれています。19代大井帯刀は天保飢饉の際に、飛騨はもちろん出張陣屋(越前本保陣屋)領内でも救済措置を講じました。20代豊田藤之進は洪草焼を起こし、また蚕業を盛んにしました。

■歴代代官郡代と飛騨での出来事

代	代官・郡代名	在任期間	飛騨での出来事
初代	伊奈半 ^{ただあつ} 十郎忠篤	元禄 5 年(1692)8 月～元禄 10 年(1697)10 月 (関東郡代と兼任)	元禄 8 年高山城破却
2 代	伊奈半 ^{ただのぶ} 左衛門忠順	元禄 10 年(1697)12 月～正徳 2 年(1712)2 月 (関東郡代と兼任)	元禄 15 年初の山林調査
3 代	伊奈半 ^{ただみち} 左衛門忠達	正徳 2 年(1712)5 月～正徳 5 年(1715)7 月 (関東郡代と兼任)	開拓のため古城跡の調査 台風あり
4 代	森山又 ^{さねみち} 左衛門実道	正徳 5 年(1715)7 月～享保 6 年(1721)3 月	この代から専任代官となる 享保元年御料所巡見 享保元年山王祭初め、同 3 年八幡祭初め
5 代	亀田三 ^{みちなが} 郎兵衛三脩	享保 6 年(1721)8 月～享保 9 年(1724)5 月	享保 6 年植林令 享保 8 年三町に用水構を新設
6 代	長谷川庄五 ^{ただくに} 郎忠国	享保 9 年(1724)5 月～享保 13 年(1728)5 月	享保 9 年定免法の実施
7 代	長谷川庄五 ^{ただたか} 郎忠崇	享保 13 年(1728)5 月～延享 2 年(1745)3 月	享保 18 年米価暴騰により一揆、商家 9 軒を打毀す 元文 3 年高山陣屋常住となる 元文 4 年『飛州志』を編纂(延享 2 年脱稿)
8 代	幸田善太夫 ^{たかまさ} 高成	延享 2 年(1745)7 月～寛延 3 年(1750)6 月	
9 代	柴村藤右衛門 ^{もりたか} 盛喬	寛延 3 年(1750)9 月～宝暦 6 年(1756)6 月	
10 代	上倉彦左衛門 ^{のぶゆき} 信門	宝暦 6 年(1756)12 月～宝暦 11 年(1761)5 月	
11 代	布施弥一郎 ^{あきまさ} 胤将	宝暦 11 年(1761)7 月～明和 2 年(1765)12 月	
12 代	大原彦四郎 ^{つぐまさ} 紹正	明和 2 年(1765)12 月～安永 8 年(1779)9 月	大原騒動起こる(明和・安永騒動)
13 代	大原亀五郎 ^{まさずみ} 正純	天明元年(1781)7 月～寛政元年(1789)8 月	天明の飢饉起こる 大原騒動終結(天明騒動)
14 代	飯塚常之丞 ^{まさなが} 政長	寛政元年(1789)11 月～寛政 12 年(1800)4 月	
15 代	小出大助 ^{てるみち} 照方	寛政 12 年(1800)閏 4 月～享和 3 年(1803)12 月	
16 代	田口五郎左衛門 ^{よしたか} 嘉古	文化元年(1804)4 月～文化 8 年(1811)2 月	
17 代	榊原小兵衛 ^{ながよし} 長義	文化 8 年(1811)3 月～文化 12 年(1815)3 月	
18 代	芝与市右衛門 ^{まさもり} 正盛	文化 12 年(1815)9 月～文政 12 年(1829)8 月	
19 代	大井帯刀 ^{ながまさ} 永昌	文政 12 年(1829)11 月～天保 10 年(1839)9 月	天保の飢饉起こる
20 代	豊田藤之進 ^{ともなお} 友直	天保 10 年(1839)10 月～弘化 2 年(1845)4 月	
21 代	小野朝右衛門 ^{たかよし} 高福	弘化 2 年(1845)4 月～嘉永 5 年(1852)閏 2 月	
22 代	福王三郎兵衛 ^{ただあつ} 忠篤	嘉永 5 年(1852)9 月～安政 5 年(1858)2 月	
23 代	増田作右衛門 ^{よりおき} 頼興	安政 5 年(1858)4 月～元治元年(1864)6 月	
24 代	高柳小三郎 ^{もろちか} 元暉	元治元年(1864)6 月～慶応 2 年(1866)2 月	
25 代	新見内膳 ^{まさかつ} 正功	慶応 2 年(1866)6 月～慶応 4 年(1868)1 月	竹沢寛三郎飛騨に入る

(出典：『飛騨金森史』ほか)

(5) 明治時代以降

① 明治時代～大正時代

慶応 4 年(1868)、飛騨国最後の郡代新見内膳が江戸へ逃げ、幕府直轄時代はあっけなく終わりました。同年 2 月 7 日に勅命を受けた阿波国の郷士の竹沢寛三郎が高山陣屋へ入り、続いて 3 月 3 日に旧

水戸藩士の梅村速水と交替して、5月23日飛騨県（翌月「高山県」と改称）ができました。高山県知事となった梅村は熱意と新しい計画で政治改革をしましたが、古いしきたりに慣れ親しんだ飛騨の人に受け入れられず、明治2年(1869)、梅村知事の罷免を求めた町人らによる一揆である梅村騒動が起きました。

明治4年(1871)の府県廃合により高山県を廃し、飛騨は筑摩県の一部となります。同9年(1876)に筑摩県が廃止され、飛騨の三郡は岐阜県に合併されました。

高山陣屋は、飛騨県、高山県の庁舎となり、後、筑摩県支庁、岐阜県高山支庁となって国の役人が駐在しました。明治12年(1879)からは飛騨三郡の郡庁舎、明治30(1897)年からは大野郡役所、郡制廃止後の大正15年(1926)からは岐阜県飛騨支庁として利用されました。

明治9年(1876)に、飛騨地域で初めての洋風建築である煥章学校が完成しました。

明治22年(1889)に町村制が施行され、地方自治の権限を持った高山町ができ、高山町役場が開場しました。明治28年(1895)に高山町役場が新築され落成しています。

近代産業の育成は、富国強兵に必要であったため内務省が殖産興業として力を入れました。高山は開産社、永昌社、三星製糸などの製糸業が全盛時代を迎えます。明治37年(1904)に高山で初めて電灯がつき、大正元年(1912)に電話交換業務が開始されています。

国鉄高山線の建設促進運動は明治から始まり、大正6年(1917)に「飛騨鉄道速成同盟会」が組織されました。大正9年(1920)、高山線の第一歩である岐阜―各務原間が開通しました。



写真14 馬場町にあった煥章学校

② 昭和時代

昭和9年(1934)10月25日、高山線が全線開通し高山駅が開業しました。鉄道の開通は飛騨の開発に大きく貢献するはずでしたが、やがて戦争に突入し、飛騨の近代化は戦後を待たなければなりません。

昭和11年(1936)11月1日、高山町と大名田町が合併して市制が施行され高山市が誕生しました。11月3日から5日間、様々な祝賀行事が開催されました。翌年に日中戦争



写真15 開業した頃の高山駅

が始まり、国民は総動員されます。昭和16年(1941)に城山公園にあった2門の大砲が、翌年に市内各寺院の梵鐘が、供出されました。また、昭和19年(1944)に高山航空工業会社が設立され、木製の航空機部品が製造されました。昭和20年(1945)8月2日、高山に爆撃予告のビラがまかれましたが、15日に終戦を迎えたことで爆撃を免れました。なお、戦中の昭和18年(1943)に、上枝村と合併しています。

戦後は、昭和22年(1947)に始まった農地改革により経済界の再編成が行われ、昭和25年(1950)に上水道工事に着工。昭和30年(1955)に大八賀村と合併し、財政再建団体からの脱出、衛生センターの建設と近代化を進めました。また昭和23年(1948)に天井に窓がついたロマンスカーによる乗鞍

登山バスの試運転を開始し、戦後3年目にして早々と山岳観光に着手したほか、昭和25年(1950)に城山公園と乗鞍岳一帯を会場とした高山パラダイスと乗鞍まつりが開催され、高山や乗鞍のPRが行われました。昭和30年(1955)に飛騨の祭りで初めて山王祭(春の高山祭)がNHKにより全国にテレビ放送され、昭和35年(1960)に高山祭屋台が国の重要民俗資料(現在は重要有形民俗文化財)に指定されました。

昭和38年(1963)、「暮しの手帖」に“山のむこうの町”として高山が紹介され、市街地に訪れる観光客も徐々に増えましたが、宿泊客は、温泉地である下呂や平湯に多い状況が続きました。

高度経済成長期の昭和30年代後半、子供会による清掃活動や宮川への稚魚の放流式を皮切りに、昭和40年(1965)の岐阜国体に向けて、「町をきれいにしよう」と市民運動が展開され、町並み保存、川を美しくする運動が始まりました。昭和40年代になると、高山祭屋台会館や飛騨民俗村・飛騨の里の開館、乗鞍スカイラインの開通など観光客の受入体制が整い、入込数が飛躍的に伸びました。昭和51年(1976)に年間観光入込客者数が初めて200万人の大台を突破しました。また、昭和54年(1979)に三町地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

昭和50～60年代は観光イベントが数多く開催され、昭和63年(1988)7月に、ぎふ中部未来博覧会が、同年9～10月に飛騨・高山博が開幕しました。



写真17 宮川をきれいにする会による清掃

③ 平成時代から令和へ

平成の幕開けは、中部縦貫自動車道の建設計画でした。

平成9年(1997)の安房峠^{あぼう}道路開通、同12年・16年・19年(2000・04・07)の高山清見道路開通(延伸)により中央自動車道、東海北陸自動車道や北陸自動車道とつながり、観光入込客数が年間約300万人の観光都市へと躍進します。

平成9年(1997)に高山市三町伝統的建造物群保存地区の範囲を拡大し、平成16年(2004)に高山市下二之町大新町が重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。平成28年(2016)4月25日に、「飛騨^{ひだのたくみ}匠の技・こころ一木とともに、今に引きつぐ1300年一」が日本遺産に認定され、同年12月1日に、「高山祭の屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録されます。有形・無形の歴史文化資源を有する高山市は、人・自然・文化がおりなす活力とやさしさのある飛騨高山として成熟を続け、平成31年(2019)に観光入込客数が市町村合併以降最多の473万3千人となりました。

平成31年度(2019)に始まったコロナ禍は、市民生活に大きな影響を与え、観光客なども大きく減少しました。高山祭をはじめ、多くの神社の祭礼行事が中止や縮小となり、伝統芸能や伝統行事を継承していくうえでも少なからぬ影響を及ぼしました。

そのような中で、令和4年(2022)9月に料亭洲さきが国の重要文化財に指定され、令和7年(2025)3月に、松倉城跡が国の史跡に指定されています。

クラウドファンディングを活用して、伝統芸能の継承に資する映像作成や郷土の偉人である金森長近の情報発信など、歴史文化資源を保存・活用するための新たな取組も進められています。